

【報告】『公儀普請(天下普請)における諸大名の石材調達と石垣構築技術』

別府大学教授 白峰 旬

よろしくお願いいたします。

皆さんのお手元にあるパンフレット「シンポジウム 天下普請にみる石垣技術」の7頁をご覧ください。その中に私のまとめたものが7～10頁に載っております。何分にも全て書けなかったものですから、パワーポイントにまとめてきましたので、それを見ながら説明していきたいと思っております。

【天下普請という呼称について】

本日、「公儀普請(天下普請)における諸大名の石材調達と石垣構築技術」というタイトルでご報告いたします。

まず、天下普請という呼称についてですが、一般には天下普請という言い方が定着していますが、文献史料を見ますと「公儀普請」という言葉のほうが正しいと言えます。同時代史料、特に大坂城普請ですと、元和期、寛永期の史料を見ますと、「公儀御普請」という用例が多いわけです。天下普請という表記は近世の一次史料では見られないということでございます。そこで、この報告では「公儀普請」という言葉を使わせてもらいたいと思います。

公儀普請についての史料での表記ですが、例えば、膨大な細川家の史料でこの公儀普請の用例を見ると、「公儀之御普請」、あるいは「公儀御普請」といった事例があります。細川家史料に限らず、当時の京極忠高の書状などにも「公儀御普請」とあり、公儀による普請といった意味での使われ方をしております。

【公儀普請とは何か】

公儀普請とは何かということをご説明いたしますと、江戸幕府が主導した巨大プロジェクトと考えると分かり易いと思います。今でいうと大規模公共工事、そういったものであります。幕府がお城を造るという事で大規模な公共工事をする、そういった理解でいいと思います。

それでは、その大規模公共工事にどういうノウハウを投入したかということですが、まずは諸大名を動員することです。これは先ほどの北野博司先生のお話にもありましたが、幕府が諸大名に普請役を賦課して、諸大名を動員します。諸大名が何をするかということですが、ヒト・モノ・カネ・スキルと示しましたが、まずヒトという点で



天下普請という呼称について

- 史料用語としては「公儀普請」が正しい
- 同時代史料(同時代に大名が発給した史料)、つまり、一次史料では「公儀御普請」という用例が多い
- 天下普請という表記は近世初期の一次史料には見られない

公儀普請とは何か

- 公儀普請とは、幕府主導の巨大プロジェクト(大規模公共工事)である
- 諸大名を動員して、ヒト(諸大名が国許から普請衆を送り込む、または日用を雇う)・モノ(石材を調達して普請現場に搬送)・カネ(諸大名が多大な資金を投入)・スキル(石垣構築技術を持った穴生が技術指導)が集中的に投入された

いうと、諸大名が国許から普請衆を送り込みます。実際に普請に携わる人数を送り込みますが、足りなかったときは江戸・大坂などの都市部である場合は、日用^{ひよう}を雇うということをしており
ます。モノとは、石材を調達することです。これも大名にとって重要な仕事です。例えば、大
坂城だと瀬戸内海の小豆島などから舟で石材を運んで、それを普請現場に搬送するというこ
です。石材の調達は当然お金がないとできませんので、多大な資金を投入するわけです。それ
からスキルですね。今日のテーマと関連しますが、石垣普請では石垣構築技術を持った穴生と
いわれる専門の技術者集団が指導していました。

こういうふうにヒト・モノ・カネ・スキルが集中的に投入された、それが公共工事である公
儀普請と理解していただきたいと思います。これは逆にいうと、幕府の独力では大坂城のよう
な大きな城はできないので、諸大名を動員したと考えることもできます。

この公儀普請でこういった大名が活躍するかというと、特に西国の大きな大名、先ほどの北
野先生のお話ですと、加藤清正の息子の加藤忠広ですとか、田中忠政のような大規模な西国大
名がその石垣普請のスキルを投入し、公儀普請に参加していたのです。

現代の言葉で言いますと、複数の大手ゼネコン、
例えば、鹿島建設とか清水建設などの力も技術もある
大手のゼネコンが一緒になって一つの工事を行う、
ジョイントベンチャー（JV）と言いますか、共同
企業体と似たような形だと理解すると分かり易いと思
います。

公儀普請で重要な役割を果たした人物の一人として、伊勢津藩主の藤堂高虎がいます。築城の名手として公儀普請で活躍した外様大名です。これまでの藤堂高虎の人物評価は、世渡りのうまい外様大名という歴史小説的な理解が先行していましたが、公儀普請における藤堂高虎の役割を考えると、家康の駿府政権における築城担当のブレーンであったと考えられます。そういう位置づけのほうが分かり易いと思います。

【加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル】

先ほどの北野先生のお話にもありましたが、元和期の大坂城普請における加賀藩のお話です。加賀藩にとってはあまり名誉な話ではないのですが、加賀藩が大坂城普請に関与した時に技術的なトラブルがあったという話です。その時、加賀藩は青屋口の石垣を担当しました。

藤堂高虎の書状を見ると事細かに出てきます。具体的にどういう話かという、元和6年、第1期の大坂城普請ですが、3月1日に鍬始めが行われ、土

公儀普請とは何か

- 複数の大名(特に石垣普請のスキルを持つ西国の大大名)が公儀普請に参加
↓
- 現代で言えば大規模公共工事において、複数の大手ゼネコン(鹿島建設、清水建設など)が一緒になって一つの工事をおこなうJV(ジョイントベンチャー)(=共同企業体)に似たようなもの

公儀普請とは何か

- 築城の名手として藤堂高虎(1556~1630)は有名→伊勢・伊賀23万石余の大名
- 近世初期の公儀普請に深く関与した外様大名
- こけまでは世渡りのうまい外様大名という評価(歴史小説的理解)が先行

公儀普請とは何か

- 藤堂高虎は城普請関係のスキル(技量)に精通している→公儀普請の現場に赴いて直接関与した(篠山城普請、大坂城普請など)
- 家康の大御所政権(駿府政権)における築城担当(公儀普請担当)のブレーン(顧問的存在)であったと考えるべき

木工事がスタートしました。その2日後、3月3日付で藤堂高虎が書状に書いている内容ですが、北国衆、これは加賀前田家を指すのだらうと思いますが、北国衆が担当した東側の青屋口の丁場で根石の地形を見たところ、心配するような状況ではないが、青屋口で気がかりなところは豊臣時代の根石が残っていることだ、と書いています。その後の意味がよく分からないのですが、そのうえ石垣の高さは皆々というよりは低いということを書いています。

このような内容の書状を藤堂高虎が鋤始めの2日後、3月3日付で幕府年寄宛に出しています。藤堂高虎が幕閣に対して工事の報告をしているという内容です。こういう書状が続きまして、どうも藤堂高虎が北国衆と掛け合っただけで、このところは自分たちが受取った丁場だから高虎には渡せないと北国衆のほうで返答したらしく、是非とも北国衆に命じて欲しいと述べたとあります。北国衆は高虎に対して丁場を渡すことを拒否したということです。

3月6日付の書状には、大坂城の鷺池青屋口の「地心」が悪い、これは地盤が悪いということだと思えますが、「地心」が悪いところは60間あり、そこは北国衆の丁場にあるということも書いてあります。60間というのは後でポイントになってくるのですが、そういうところを北国衆（加賀前田家）が担当しているということを書いています。

ところが、担当しているのはいいのだが、北国衆はあまり石垣の「御巧者」ではない。つまり石垣普請が得意ではない点を藤堂高虎は心配している、とはっきり書いてあります。

また、藤堂高虎が「地心」が悪い60間分の石垣の担当分を受取って、堀の水を落とし、(豊臣時代)の根石を見届け、穴生または功者の者たちと相談したい、つまり石垣普請に精通したエキスパートの者たちと高虎が相談したい、と書いてあります。その結果、前田家は除外されて蚊帳の外に置かれるということですが、高虎は是非とも対策を突き止めたいと思いい前田家に申し渡した、と書いてあり、かなり強力な権限で関与しているということが分かります。

「悪所」、つまり地盤が悪いところだと思いますが、気がかりなところを「無功成衆」、つま

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 元和6年の大坂城普請(3月3日付藤堂高虎書状)※以下の藤堂高虎書状は「元和六年案紙」所収
- ①元和6年3月朔日に鋤始めがおこなわれた
- ②藤堂高虎が北国衆(=加賀前田家)が担当した、東側の青屋口について、根石の地形を見たところ、心配するような状況ではないが、青屋口で気がかりなところは昔の根石(=豊臣時代の大坂城の根石)が残っており、そのうえ(豊臣時代の?)石垣の高さは皆々が言うよりは低い

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 元和6年の3月5日付藤堂高虎書状(公儀普請奉行5名宛)
- 北国衆(=加賀前田家)は、このところが(自分たちが)受け取った丁場であり、藤堂高虎に渡すことはできないので是非とも(自分たちに)命じてほしいと述べた

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 元和6年の3月6日付藤堂高虎書状(老中4名宛)
- ①大坂城の鷺池(さぎいけ)青屋口の「地心」が悪いところは60間(=約108m)あり、このところは北国衆(=加賀前田家)の丁場の内にある

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- ②しかし、(北国衆は)あまり石垣の「御巧者」ではないので、特に(藤堂高虎は)心配している
- ③藤堂高虎が(この「地心」が悪い)60間の分を受け取り、(堀の水を)落として(豊臣時代の)根石を見届け、「穴生又ハ功者の者共」と相談して、是非とも(対策を)つきとめたいと思い(そのことを北国衆へ)申し渡した

り北国衆に渡して、その後石垣が崩れた場合どうするのかという点を心配し、普請の邪魔だと、そこまで言っています。高虎の謙遜かもしれませんが、自分(＝高虎)が担当してもどうなるか分からないが、北国衆が担当するよりはいい、自分がやるほうがましだ、と書いています。それ以外に高石垣のことも書いていて、逐一、藤堂高虎が幕閣に報告しているということです。

こうした一連の経過を見ると、大坂城青屋口の「地心」が悪いところ60間を、石垣技術が未熟な北国衆が担当していることを、高虎が心配していることが分かります。藤堂高虎自身が豊臣時代の根石を見届けて穴生と相談して対策を講じたい、としています。つまり、北国衆(加賀前田家)の技術が未熟で、藤堂高虎が直接自分で出向いて自分の目で見て対策を講じたいと言っているということが分かります。

時期的には、まだ鉄始めの直後という早期の段階であり、高虎は豊臣時代の根石を見届けたいので、石垣を高く築く前に、今のうちにやっておかなければいけない、と考えていたと思います。

藤堂高虎の北国衆(加賀前田家)に対する石垣技術の評価は低く、文面には「無効成衆」という言い方をしています。加賀藩の石垣技術に対する高虎の評価は、あくまでも元和6年の時点ですが、正しい評価か否か、高虎の独断なのか偏見なのかは別にして、元和期における諸大名が持つ石垣構築技術の技術差とも関係します。つまり、元和期における諸大名の技術格差をみる一つの事例であると言えます。

この史料中における北国衆とは、具体的にどの大名を指すのかが問題だと思います。先ほどから加賀前田家と言っておりますが、北野先生のお話にもありましたように、大坂城の普請丁場割図を見ると、青屋口の外枅形には「越前宰相」(越前福井藩主・松平忠直)と記され、39間5尺と書かれています。その枅形石と向かいの青屋口の石垣は、「松平筑前守」(前田利常)が担当したと記されています。

前田利常は大坂城普請丁場割図によると、青屋口を直線距離で67間担当していることが分かります。

そうなりますと、先ほどの藤堂高虎の書状にあったように、青屋口の「地心」が悪い60間の分というのは、直線距離と考えると、ちょうど一致します。ですから、「地心」が悪い60間分を

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- ④「悪所」で気がかりなところを「無効成衆」(北国衆のことを指す)へ渡して、以後、石垣が損じた場合どうするのか→普請の邪魔(になる)
- ⑤もっとも、藤堂高虎が担当しても「地心」が悪いところなので、どうなるかはわからない→(しかし)北国衆がするよりはよい
- ⑥高石垣もそれぞれ割り付けのごとく用意した

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- この経過のポイント
- 大坂城青屋口の「地心」が悪いところ60間を石垣技術が未熟な北国衆(＝加賀前田家)が担当していることを心配した藤堂高虎が豊臣時代の根石を見届けて穴生などとも相談して対策を講じたい、としている

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 加賀藩の石垣技術に対する高虎のこの評価(元和6年の時点)
→正しい評価か否かは別にして、元和期における諸大名が持つ石垣構築技術の技術差とも関係する

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 「松平筑前守」(＝前田利常)は、大坂城の普請丁場割図によると、青屋口を直線距離で67間担当している。よって、青屋口の「地心」が悪い60間の分、というのは、これが直線距離だとすると、北国衆＝前田利常ということになる。

担当した北国衆というのは、前田利常ではないかということがこの点から分かるわけです。

ただし、それで決まりかというところでもない部分があって、高虎の書状には「各石かきあまりの御巧者にて無御座候」と書かれています。この「各^{おのおの}」というところが問題で、「各」というのは複数の大名家を指していると考えられますので、前田利常だけかというところでもない気がします。それ以外に松平忠直などが含まれてくるのではないかと考えられます。つまり、利常が編成している第五組に所属した他の大名も含めている可能性も考えられます。加賀前田家だけの問題ではないようなところもあるかもしれないということです。

毛利家の「大坂築城地口坪割図」には、青屋口のところに「松平筑前守」（前田利常）と書かれています。

こういった話と別に『大阪編年史』第4巻（大阪市立中央図書館市史編集室編集・発行、1968年）という史料集がありますが、ここに「前田金沢系譜」という編纂史料が収録されています。ここにも前田家をめぐるトラブルが書かれています。話の内容は、元和6年の大坂城普請において、普請が終わり、諸大名の普請衆が帰国しようとしているとき、「幕府ノ吏」が、前田家の築いた石垣に膨れたところがあるのを指して、本多政重・横山長知の加賀藩年寄に対し、「宜シク改メ築クヘシ」と言ったとあります。つまり、もう一度築き直してくれ、というクレームをつけてきたということです。

これに対して加賀藩の年寄が何を言ったかというと、諸大名の普請衆が帰るときに、うちだけ残るのか、これは主君の恥になる。そうなるくらいなら自分たちは死んで、「其不敏ヲ謝セン」と願い出たのです。このように強い態度で出たものですから、石垣の築き直しはなくなったようです。利常はこの事を聞いて褒めたというお話があります。

この話と先ほどの藤堂高虎のクレームの話とどう違うのかと考えると、まず時期が違う。藤堂高虎がクレームをつけたのは普請が開始された直後の元和6年3月の話で、「前田金沢系譜」に出てくる話は普請終了後の話で元和6年9月から10月ぐらいですので、時期が違います。

場所の違いですが、藤堂高虎がクレームをつけた

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- ただし、元和6年の3月6日付藤堂高虎書状には「各石かきあまりの御功者にて無御座候」（大再-97頁）とあり、「各」（＝おのおの）としているので、複数の大名家を指すと考えられ、北国衆とは前田利常以外に松平忠直（越前福井藩主）など、第5組に所属した他大名も含めて指している可能性も考えられる

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 「宜シク改メ築クヘシ」と言われた。つまり、もう一度、築き直し（つぎなおし）をするように指示された。
- これに対して、横山長知は、諸大名の普請衆が皆、役を終えて（帰る時に）、前田家だけが残るのは、「君ノ辱（はずかしめ）」（＝前田利常の恥）なので、横山長知と本多政重がまず死んで「其不敏ヲ謝セン」と願い出た。このため石垣の築き直しはなくなった。前田利常は、このことを聞いて褒めた。

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 「前田金沢系譜」（『大阪編年史』4巻、463頁）
- 元和6年の大坂城普請において、普請が終わり、諸大名の普請衆が帰国しようとしている時、「幕府ノ吏」が、前田家が築いたところの石垣に「脹所」（ふくれたところ）があるのを指して、本多政重・横山長知（ながちか）（加賀藩年寄）に対して、次のように言った。

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 「元和六年案紙」と「前田金沢家譜」との違い
- 【時期の違い】
- 「元和六年案紙」→元和6年3月（普請開始直後）
- 「前田金沢家譜」→元和6年の普請終了後（元和6年9月～10月頃か？）

ところは青屋口であるということがはっきり書かれていますが、「前田金沢系譜」の方は場所がはっきり書かれていません。

問題点の違いとしては、藤堂高虎がクレームをつけたのは、大坂城青屋口の「地心」が悪いところ60間を石垣技術が未熟な北国衆が担当していることが問題であって、高虎が現場に出向きクレームをつけて直接介入しました。

ところが「前田金沢系譜」の場合は、石垣が完成した後に石垣が膨らんでいる事が問題だとしています。そして加賀藩の年寄が強い態度に出て拒否をして事なきを得たということです。問題点の違いが

ます。藤堂高虎の話が一次史料なので信憑性は高いと思いますが、「前田金沢系譜」は編纂史料ですので、内容に検討が必要ではないかと思います。そしてこの二つの話は別々の問題ではないか、あるいは元和6年の3月の藤堂高虎のクレームが形を違えて伝わったのか、という感じもいたします。まだよく分かりません。

【細川家での石材産出の計算式】

お話を少し変えて、皆さんお手元のパンフレット9頁の④をご覧ください。何が言いたいかというと、細川家では石材を産出する際に計算式を作っていたということです。

具体的に『細川家史料』第18巻(東京大学出版会、2002年)に出てきますが、寛永11年、肥後熊本藩主・細川忠利は寛永13年の江戸城普請の準備として石を割る者360人を伊豆へ遣わした。このうち石切が60人、1人1日3個ずつ石ができるとして、1日180個の石ができると計算していました。そして、寛永12年の正月のうちに20日分で3,600個の石ができるといふ計算式をたてていました。つまり60人で3個、1日180個、20日働いたら3,600個だといふ石材の産出の計算式を出していました。

これはどういうことかという、細川家はそれまでたくさんの石垣普請を経験していますので、寛永13年頃になると経験値を元に、石材産出の段階から非常に習熟していたということが分かります。こういったことが準備段階からできる、それぐらい西国大名のレベルの高さを示しているのではないかと

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 【問題点の違い】
- 「元和六年案紙」→大坂城青屋口の「地心」が悪いところ60間を石垣技術が未熟な北国衆(=加賀前田家)が担当していることが問題→藤堂高虎がクレームをつけて直接介入した

加賀藩の大坂城普請における石垣構築の技術的トラブル

- 「前田金沢系譜」→完成した前田家担当の石垣が孕んでいることが問題→幕吏が指摘して築き直し(つきなおし)を要求した→現場の最高責任者である加賀藩年寄2人は拒否→築き直しはされなかった

細川家での石材産出の計算式

- 寛永11年、細川忠利(肥後熊本藩主)は、同13年の江戸城普請の準備として、石を割る者360人を伊豆へ遣わした
- このうち石切は60人なので、1人1日に3つつつ石が出来るとして、1日180個の石が出来る、と計算した
- そして、寛永12年の正月のうちに20日分で3600個の石が出来る、と計算した

細川家での石材産出の計算式

- つまり、60人×3個=180個(1日)
→180個×20日=3600個(20日)
という計算式で伊豆での石材産出量を推計した
- 細川家がそれまでの経験値をもとに、石材産出の段階から、非常に習熟していたことを示す→西国大名のレベルの高さを示す

います。

【石引き】

石引の話です。ろくろは重い石を引く機械ですが、これで石を引くことができない場合は日用、つまり人力で引かせます。かの有名な加藤清正の息子の加藤忠広が大坂城普請のときに石引きをした話ですが、これがとても派手な様子だったということが文献史料に載っています。石引きというのは絵画史料によく出てきますが、笛、太鼓を使い、人を石の上に乗せて非常に賑やかに石を引いた様子が文献史料で確認できます。

【東国大名と西国大名の技術格差】

東国大名と西国大名の技術格差についてですが、当時の大名はみんな石垣普請が上手だったかという、必ずしもそうではなくて、例えば、寛永13年の江戸城普請では、幕府としてどういうふうに対応したかという、東国大名は堀の普請、西国・中国・四国・北国大名は石垣を担当するようにと命じていました。つまり、東国大名は石垣普請があまり得意ではないということを幕府も分かっていた堀普請に回し、西国大名は石垣普請を担当させるという対応をしていました。

【穴生（穴太）】

次に穴生^{あのを}についてみていきたいと思います。穴生というのは近世石垣の技術者集団であり、幕府の穴太は公儀穴太と言います。諸藩では、穴生は家臣化していきます。穴生の系譜については、石垣研究の第一人者である北垣聰一郎先生の御著書である『石垣普請』（法政出版会、1987年）に書かれていて、穴生の系譜と諸藩への派生（諸藩での家臣化）が詳細に論述されています。

穴生の存在意義を考えると、近世初頭において各藩における公儀普請対策という性格が強いのと思われます。そのために各藩が家臣として召抱えていったわけですが、江戸時代中後期になりますと公儀普請そのものがなくなってくるので、穴生がリストラされたケースもあるということが分かっています。

穴生を調べる上で手っ取り早いのが各藩の史料を見ることで、それを見ていきますと、穴生何とかという名前が出てきます。例えば、萩藩ですと穴太源

石引き

- ③加藤忠広（肥後熊本藩主）が、9間半（＝約17, 1m）の石を引いた。このような石が世上にあるのだろうか。
→（この石引きの様子は）いずれも太鼓、鼓（つづみ）、笛、女人などではやして（＝声を出して調子をとって）、（大石を引いた）
→石引きの具体的様子が文献史料で確認できる

東国大名と西国大名の技術格差

- こうした東国大名は堀、西国大名は石垣という分担の違い→東国大名と西国大名の石垣普請に対する能力差・技術格差を幕府も承知していたことを示している
- よって、幕府はあえて東国大名に対しては大規模な石垣普請（高石垣など）は賦課していない

穴生（穴太）

- 穴生（あのを）→近世石垣の技術者集団
- 公儀穴太→幕府の穴太
- 諸藩において家臣化した穴生
- 穴生の系譜と諸藩への派生についての具体的研究は北垣聰一郎先生の著書『石垣普請』（法政大学出版局、1987年）に詳しい

穴生（穴太）

- 広島藩の幕末期における職制の各職務内容を解説した明治年代の史料「御役之章程」
- 「穴生」→「アノー」とフリガナを付けて、「御普請方へ出頭シテ人夫等ヲ引受、御普請場所ニ罷越、職人等ノ差図ヲ為ス」と記載している

右衛門とか、広島藩だと鶴山次郎兵衛某といった名前が出てきます。面白いのが広島藩の明治期の史料で、幕末の頃の職制を解説した史料の「御役之章程」に「穴生」という語の横に「アノー」とわざわざフリガナを付けています。どういう職掌かというと、「御普請方へ出頭シテ人夫等ヲ引受、御普請場所ニ罷越、職人等ノ差図ヲ為ス」ということが書かれています。要するに、土木工事の現場監督みたいな書き方をしています。

このように幕末の頃になると、穴生の職務内容が石垣構築の専門職とは記載されていないのです。また、幕末になると「穴生」の読み方もどうも分からなくなっていた、ということなのでしょう。そういった時代的な変遷が分かります。

面白いのは、今から100年ぐらい前、大正3年(1914)の東大の歴史関係の学術雑誌である『史学雑誌』に「穴太役考」という論文が載っています。この内容は「穴太役というのはいかなる職掌であるか一向にわからない」と問題提起していろいろと書いてあります。要するに、大正時代には歴史学者でも穴太とは何かよく分かっていなかったということです。

先ほどの事例とあわせると、明治時代から大正時代にかけては穴太について、藩の関係者でも歴史学者でもよく分かっていなかったのではないかなということが分かります。

【大坂城普請における加賀藩の石材調達】

加賀藩関係の話で大坂城の話に戻りますが、加賀藩は大坂城普請で石材調達をどのようにしたのか、という点です。史料を見ていきますと、前田利常が普請の用意について、大坂の有力町人である安井九兵衛に頼んでいるということがよく出てきます。具体的な数が出てくるところを見ますと、「当年あつらえた石3,000余りが大坂へ届いた。残りの石も異儀無く大坂へ着くように馳走を頼む」と書いてあります。馳走を頼む、というのは、尽力してくれ、という意味です。ですから、加賀藩として石を3,000個以上大坂城普請に使ったということが史料から明確に分かるのです。

このように加賀藩が大坂城普請の石の調達を安井九兵衛に頼んでいる。そして、家臣を安井九兵衛のところへ遣わすので指南を頼む、と書いてある。石

穴太(穴生)

- 今から95年前の大正3年(1914)の『史学雑誌』25編1号の論文である沼田頼輔「穴太役考」→穴太役は「如何なる職掌であるか一向分らない」と問題提起して考察されたもの→「穴太の手筋の者」と記している→この場合の手筋とは「技量」の意味か？
- つまり、大正3年の時点では、歴史学者でも穴太の意味が全くわからなかった、ということになる

大坂城普請における加賀藩の石材調達

- 元和9年?の10月29日付安井九兵衛宛の横山長知(よこやまながちか、加賀藩年寄)書状(大再-144頁)
- 先年(=元和6年か?)の大坂城普請の時分よりいろいろと(安井九兵衛)が馳走(=尽力)した
- 来年(=寛永元年か?)の(大坂城)普請についても(安井九兵衛の)馳走を依頼

大坂城普請における加賀藩の石材調達

- それにつき、当年(=元和9年か?)あつらえた石3000余が大坂へ届いた
- 残りの石も異儀なく(大坂へ)着くように(安井九兵衛に)馳走を頼む
- 「中越之石」(意味不明、越前や越中の石という意味か?)も「堀出来」(堀が完成したという意味か?或いは掘り出したという意味か?)したので、はかどっている

大坂城普請における加賀藩の石材調達

- 「其元」(=大坂)での普請の準備について富田下総守(加賀藩家臣)を遣わすので、万事相談して、(安井九兵衛に)肝煎(=世話)を頼む

の準備は複数の年に渡っているようだという事も分かります。それだけではなくて、残った石の売却も安井九兵衛に頼んだりしています。

繰り返しになりますが、前述の大坂へ届いた石 3,000 個余りと、それ以外に残りの石も大坂に届く予定であることが分かります。ですから加賀藩が大坂城普請に調達した石が 3,000 個以上だったということが分かります。ただし、どこから石を運んできたかということはここには書いてありません。このように、加賀藩が大坂の有力町人（安井九兵衛）に依頼して、大坂城普請の石を調達したことが分かります。

こういった大坂の町人を使った石の調達は加賀藩だけのことでなく、徳島藩などもやっていたということが史料から確認されています。ですから、安井九兵衛は、いろいろな藩の石の調達を請け負っていたということも分かります。それから「安井系譜」の記載を見ると、元和6年の大坂城普請において、城外の玉造^{たまつくり}、あるいは鳴野^{しぎの}近辺で空き地43,000坪を北国石の運送の揚場^{あげば}（石揚場^{いしあげば}）にしたとあります。これも安井家が尽力しているのです。鳴野というのは大坂城の東北側、玉造というのは南側に位置しております。ここに加賀前田家が石を運んできて、石置場にしたのです。43,000坪の広さとは、現在の東京ドームが3つ入るくらいの広さで、それぐらい広大な敷地に石をたくさん持ってきたということが分かります。

後はパネルディスカッションで補足したいと思います。有り難うございました。

大坂城普請における加賀藩の石材調達

- 「安井系譜」の記載（『大日本史料』第12編の33、元和6年正月23日条）
- 元和6年の大坂城普請において、大坂城外の玉造（たまつくり、現大阪市中央区玉造）・鳴野（しぎの、現大阪市城東区鳴野西など）近辺にて、空き地4万3000坪（豊臣家から賜って安井九兵衛が請所〔＝管理地〕にした）に北国石の運送の揚場（あげば＝石上場）にした→安井九兵衛が周旋した

大坂城普請における加賀藩の石材調達

- 鳴野（しぎの）→大坂城外の東北側に位置する
- 玉造（たまつくり）→大坂城外の南側に位置する
- こうした場所を運送してきた北国石の石上場（いしあげば）にした
- 加賀藩では大坂城普請に北国石を大坂へ運送したことがわかる
- 大坂での加賀藩の石上場の確保には安井九兵衛の周旋が必要だった